

学会創立20周年記念特集

クロマトグラフィー科学会と私

寺田 清

(株式会社ヤクルト本社 医薬品事業本部長 専務取締役)

私は、大学では薬学部で有機合成を専攻しておりました。卒業後、石油会社に就職し、1982年に現在の株式会社ヤクルト本社に入社いたしました。ヤクルト本社では、医薬品部に配属を命ぜられました。

今ではヤクルト本社は、抗がん剤のメーカーとして病院など専門分野では認知されつつあります。しかしながら、私が入社したころのヤクルト本社の医薬品事業は、酵素製剤をほぼそと扱っている小さな部門でした。こんな部門ですから、新しい医薬品を開発しようにも設備も予算もない状態でした。

この小さな部門に転機が訪れました。今でこそ世界的に有名な抗がん剤に成長した「カンプト」の開発に当時着手をしたのです。

当社の中央研究所に沢田誠吾（薬学博士：現、特別研究員）という若手の研究員がいました。沢田博士を中心に数人の若者が集い、毎日残業してでき上がったのが「塩酸イリノテカン」でした。1984年には、当時の第一製薬（現、第一三共）と共同開発を行うことになりました。その後は、第一製薬と作業分担をし、順調に開発が進んでいきました、と言いたところですが、実は、ヤクルトでは全てが始めてのことで、大分苦労したことを覚えています。

医薬品の開発には、非常に経費がかかります。特に臨床試験は、他の CMC 試験や非臨床試験の比ではありません。まだ、海のものとも山のものとも分からない、このカンプトの開発を、当時の当社の食品部門が黙って支援し、予算を提供してくれたことを思うと、今でも涙がこぼれる思いです。

カンプトは、水溶性注射剤として1991年に当時の厚生省に製造承認申請を行い、1993年に承認を得ることができました。この承認には、1985年に Liu 博士らによって、カンプト

の母核が DNA の切断と再結合に寄与するトポイソメラーゼ I を阻害するという知見が得られたことも、追い風のひとつであったことは間違いないのですが、私は、何より開発を担当した当社の社員の頑張りをほめてあげたいと思います。

現在では、カンプトに加え「エルプラット」の開発にも成功し、オンコロジー専門の会社を目指しておりますが、紙面の関係で、別の機会に譲ることにします。

クロマトグラフィー科学会には、当時三共株式会社の高萩英邦博士にお誘いを受けました。理事として第3および4期（1994～1997）、監事として第5および6期（1998～2001）、評議員として第7期（2002～2003）を務めさせていただきました。私自身、分析の専門家ではありませんでしたので、心苦しかったのですが、学会の会場として「ヤクルトホール」を提供して欲しいということでしたので、それならとお受けいたしました。その後、社内の当時の若手研究員の相山律男博士（現、クロマトグラフィー科学会理事）に大役を押し付け、現時に至っております。

私が大学時代に習ったクロマトグラフィーといえば、ペーパークロマトグラフィーのみで、ろ紙上にガラスキャピラリーで試料溶液をスポットし、展開槽の中で溶媒で一晩かけて展開したものでした。それが、現在では、ガスクロマトグラフィーや液体クロマトグラフィーの進歩により、わずか数分間、数秒間で分析できてしまいます。この進歩には、大変驚いています。

科学技術の進歩は、化学を解析する分析技術の進歩の賜物だと思います。このような分析技術、特に分離分析技術であるクロマトグラフィーの最先端である学会が、今後とも進歩・発展することを期待しております。